

青春を賭けた業界

山本 義男

このたびお手伝いさせていただいた関東支部報の広報編集部会からご指名頂き大切な紙面を頂戴することとなった。表題は「先達からの提言」という大変重いものであった。ここにとりまとめた拙文が果たして提言といえるかどうか。

これはこの業界に50年余席を頂いた一技術者が感謝を込めての往時の回顧録である。業界のある時期の再現になれば幸いである。

1. 業界への第一歩

太平洋戦争の戦況が連戦連勝の報道の中で私たち中学生（旧制）はいずれ戦場に立ち向かうことの覚悟を固めつつ日々の学業と、軍から派遣された配属将校の叱咤激励のもとに皇国民としての使命感に燃え立つ日々を送っていた。

自宅の周辺でも学校の近くの駅でも毎日のように出征兵士を送る歌が響いていた。そうした環境の中で昭和17年度の卒業式は繰り上げられその年の12月に実施された。私は卒業式の翌日には、国立にあった「大日本航空(株)航測所」の玄関に立っていた。これがこの業界への私の第一歩であった。航測課に配属された私はそこで終生の師となった樋口典正氏の教えを受けることとなったのである。

2. そして終戦

戦況は益々激烈となり私の周辺からも先輩や同僚が次々と戦線に向かっていった。毎日のように職場から国立駅までの1キロ程の道を「勝つて来るぞと勇ましく…」を皆で合唱しながら見送りの日々が続いた。そして職場は次第に寂しくなっていた。空には毎日のよ

うに空襲警報のサイレンが鳴り響き、東方の三鷹あたりと思われる上空ではB29の遙か下方からごま粒のような戦闘機が戦いを挑んでいた。そうしたある日、職場の上空に艦載機が編隊で飛来し、そのうちの一機がこっちに向かって突っ込んできた。社員は慌てて庭先の防空壕に飛び込んでいった。おーい山本危ないぞ早く来い!!と叫ぶ声が聞こえた時にはグラマンの機銃音が当たりに響き渡った。先輩や同僚の声に向かって必死に駆けた。その途端に松の木の根っこに足を取られてぱったりその場に倒れてしまった。アッ山本はやられたとみんな一瞬そう思ったそうである。後で松の木の根っこに食い込んだ銃弾を掘り出したら直径1cm、長さ6cmくらいのものであった。

やがて8月15日を迎えた。職場は連合軍に接收されることになり社員はそれぞれの出身地に戻っていった。ほとんどが九州地方の出身であった。私は家が近いと云うことでそのまま留守番を仰せつかって10月まで勤務した。

この間に進駐軍からの機材接收の兵隊さん達が大きなトラックを持ってやってきた。丁寧にグリスを塗って梱包した木箱がつぎつぎとアメリカ兵によってトラックに積まれていく様子を玄関でみつめながら涙の溢れてくるのを押さえきれなかった。

3. 改めて米軍の測量隊への就職

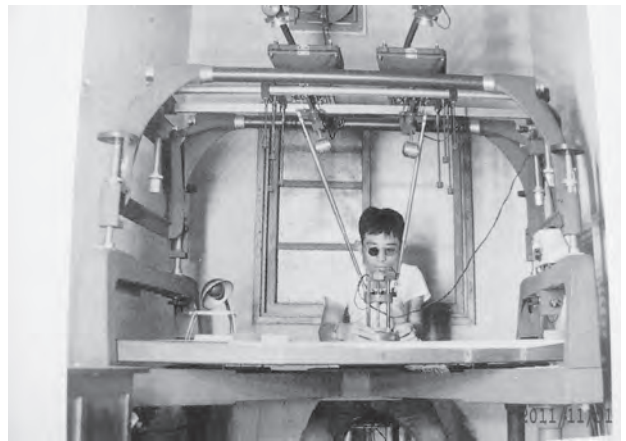
その後、国立の職場を離れた私は先輩に紹介されて東京都の建設局の職員になった。ここでの私の仕事は主として戦後復興の計画図面に用途地域の色塗りであった。そのときの課長は石川栄耀氏であった。本庁の会議にはいつも資料を持って建設局のある神田から有

楽町まで課長の車でお供した。そうした日々の中で米軍への就職を求める文書が届いた。折角紹介されて就職した都の職場を離れるのは心残りであったので課長に相談すると、これからは航空写真測量の時代になる。折角のチャンスは逃すでない。必ず君のためになる。課長の言葉に励まされて、その年昭和21年10月7日新宿の伊勢丹3階の64工兵大隊の職場に向かった。

指定された三階の職場には何と顔見知りの面々が一団になって「よーっ来たか」と大声で迎えてくれた。再就職且つ昨日まで敵として戦った米軍の中での就職の不安は一変に吹き飛んでしまった。ここではマルチプレックスによる図化が本業となった。此処の図化機は戦前使用していたツァイス社製のマルチプレックスより一回り大きく装着乾板もそれに準じて大きいので画像の鮮明度も一段と高かった。そうした中で5年後に朝鮮戦争が勃発した。職場にはさつき撮影したばかりの戦場の写真が毎日のように送られてきた。ストライクホートというその写真は幅23センチ長さ50センチほどの細長い画像であった。勿論初めて見る代物で、縮尺は1/10,000程度で山頂に据えられた高射砲までよく見えていた。北鮮軍と中共軍の勢力が勝って半島南岸まで国連軍が押し込まれたときはどうなることかと気が気ではなかった。もし国連軍が負けたら俺達は戦犯だなどと話し合った。

4. 新しい職場、作業歩掛かりの発見 (パシフィック航空測量(株)の創設)

昭和27年、3先輩の肝いりでパシフィック航空測量(株) (以下「パスコ」) が創設された。その前に航空写真測量として国際航業(株) (日本航測(株)) が、続いてアジア航測(株)が我々の仲間を中心として発足していた。3番手のパスコはケルシュプロッターの導入によってスタートしたのである。当時航測業界は国際航業(株)の道路、アジア航測(株)は河川という分野に確たる実績を確立しており後続のパスコの参入する余地は殆どなかった。そんな中でパスコの狙いは、都市計画図作成に焦点を絞った市町村へのアプローチであった。この場合ケ



ケルシュプロッター

ルシュプロッターの果たした功績は甚大なものがある。

さて、図化作業の積み重ねの日々の中で何とか自分の努力の跡を残せないものかと考えた私はとりあえず今日一日の作業量を詳しく記録しておくことにした。方法は図化用紙に展開した10センチ方眼の枠目が今日一日でいくつ埋めることが出来たかを時刻とともに記録する方式である。今ならコンピュータで簡単にできることを当時は手書きでやっていたのである。

戦前の日航時代の図化は図面の端から地形も地物も手当たり次第に描画する方式であった。米軍の方式は先ず道路・鉄道・河川等の長狭物を、その後家屋等の地物を描画し、地形(コンター)は最後に描画するのである。この米軍方式はやってみると能率がよい。また書き落としなどが少なくなったのはその効果だと思う。そうした図化に対するいろいろな試行錯誤を重ねながら記録は次第に増加していった。後日このときのデータを作業歩掛かりとして活用した。当時図化の経費を算出する場合は先輩達が経験した大まかなモデル数を対象とした日数が基になっていた。このデータを活用して項目毎作業の積算が出来るようになった。ある日、樋口常務が見回りに来て件の記録を眺めながらこれはものになるかもなど独り言をいいながら去っていった。それから数日後営業部への転属命令を受けたのである。新しい職場は新分野の開拓に燃えていた。時に昭和30年、終戦後10年経った4月1日であった。